

## 会議録：「第2回恵那市産業振興会議」

---

日時：平成30年2月1日（木曜日）10：00～

場所：恵那市役所会議棟中会議室A・B

参加者：出席13人、欠席2人（別紙参照）

### 1. 開会

○事務局：「只今から第2回恵那市産業振興会議を始めます。本日は、堀委員、勝委員様はご欠席です。レジメに沿って進行します。はじめに小坂市長からあいさつ申し上げます。」

### 2. 市長あいさつ

小坂市長：「恵那市産業振興会議にお集まりいただき、ありがとうございます。昨年7月7日に第1回振興会議を開催いたしました。この半年間に8回の検討部会を重ね、今回素案となるビジョンが出来上がってきました。委員の皆さまには率直な意見をいただきたいと思います。」

先ほどのことですが、飲食店の方から20数年続けてきたランチをやめると聞きました。その主な原因は人手不足です。従業員を守るためにランチ営業をやめて夜の営業だけに力を注ぐことに決めたそうです。最近の新聞でも人手不足が深刻で、業績が悪くなくても倒産する会社もあります。これから先、人口が減って行く中では、そのようなことは益々起こりえます。ビジョンの中でも触れられている部分があるかと思しますのでよろしくをお願いします。」

### 3. 議事

○事務局：「ここからの議事・進行は、当会議の会長・森岡様にお願いします。」

○森岡会長：「次第に沿って進行します。議題①、恵那市産業振興ビジョン検討部会の開催状況について、②恵那市産業振興ビジョン素案について事務局から説明をお願いします。」

○事務局：「①恵那市産業振興ビジョン検討部会の開催状況、②恵那市産業振興ビジョン素案について—説明します（概要を説明）。

具体的な事業としていくつか挙げていますが、それらは特に委員の方の要望の高いものとして、ビジョンのパイロット事業の意味を持ちます。事業を実施していく中で、事業者の皆さまがどのような関わり方をしたらいいか、どうしたら個々の利益につながるかということを考えて行きながらビジョンを肉付けしていきたいと考えています。その議論を平成30年度も引き続き振興会議やビジョン検討部会で行っていく予定です。」

○森岡会長：「事務局からビジョン概要の説明がありました。委員の皆さまには個別の事業について議論するのではなく、全体として最適な内容となっているかを議論いただきたい。」

○委員：「資料1の8ページにある『創業比率』の定義を教えてください。」

- 事務局：「『創業比率』は、市内の事業者数に占める創業者数割合です。」
- 委員：「耕作放棄地も問題だが、最近、東濃地域ではアパート建設が多くなっている。農地を管理できなくなった高齢者がアパート用地として提供しているが、どこかで歯止めをかける必要がある。山のことであると、先日、相当な面積の山を持っている名古屋の方が、相続税が払えないということで売ろうとしたが、買う人がいないらしい。伐る木がある山をどうにかしなければいけない。農地をどうにかしなければいけないということもビジョンの中で考えるといい。また、高齢者が集える場所づくりも考えていけるといい。」

○森岡会長：「今の意見に対してどう考えるか。」

- 事務局：「検討部会を進める中で一番難しかったのは、委員の方たちが大きな枠組みで考えたときに、自分たちがどう関わって行ったらいいのかが見えて来ない部分がありました。32の展開事業を挙げていますが抽象的なものが多くなっています。それは、そこまでの掘り下げた議論が出来なかったためです。議論が進まない中でも大きな課題というのが見えてきたと感じています。商業・観光部会での『ブランドをつくること』、工業部会での『人手不足』、林業部会での『今ある資源を生かし、どう発信するか』、農業での『生産されている農産物をどう使って行くか』であると考えており、まずは一番大きな課題について行動に移してみよう。行動してやっと見えてくることのあるのではないかと考えています。そこでさらに議論と提案をしてもらう予定です。」

- 森岡会長：「ビジョン素案の説明の中に、『体験プログラムづくり』という内容があった。若い人に先生になってもらい教えてもらう。それによるつながりや場を提供する内容も議論の中にあっただのではないか。具体的な活動についての説明が不足していたのではないと思うが、そのような内容がアクションプランの中にあっただのではないか。」

- 事務局：「地元の若い方にも関わってもらうというものもありましたが、部会の中では、自分たちが持っている資源はお金にならないのではないかと考えている議論が多くあり、『よそ者、ばか者、若者』と言われるように、外部からの意見を取り入れるのも一つの方法でないかと話し、平成30年度の新規事業でも外部の力を取り入れることも盛り込んでいます。」

- 委員：「棚田には若い人が市外から来ているが、盛り上がりがある印象。」

- 長谷川農政課長：「全国棚田サミットにおいて、坂折棚田も全国の棚田地区の方と連携してPRしていますが、新たな取り組みとして農泊を進めています。国内から坂折棚田で泊まってもらうため、空き家調査も進めています。」

- 森岡会長：「林業は男の仕事だというイメージだったが、最近では『林業女子』という言葉もある。林業従事者を増やすことも検討したほうがいいのでは。」

- 光岡農林部長：「林業も農業もそうですが、まずは魅力ある産業であることを情報発信して就農者や就業者を増やして行くことを考えています。来年度事業として、農業については『食』と『農』のポータルサイト構築、林業についてもポータルサイトの構築を考えています。」
- 勝川林政課長：「検討部会でも、材木が売れるのが一番いいが、市場を変えることは簡単ではありません。そこで付加価値を上げるため、木工製品の開発なども意見として挙がりました。『えなの森づくり委員会』でもポータルサイトの必要性が叫ばれており、ポータルサイトを活用して魅力を発信し、本当に林業が好きの方を外から呼ぶことが出来るよう、既存のサイトを充実させていきたい。」
- 森岡会長：「小さくても成功体験を積み重ねていくためのパイロット事業を考えたと理解している。」
- 委員：「15年ほど前、岐阜県の事業でマグネシウムを岐阜県の産業にしようと活動した。ミズノのゴルフドライバーをマグネシウムで作ろうとして、県内企業をピックアップしてプロジェクトチームを編成し、製品開発を行った。距離が出ないため商品化には至らなかった。恵那市でも企業とタイアップして、『恵那市はこれで売る！』というものを作っていたと理想。」
- 森岡会長：「エンドユーザーに結びつけるまで商品化することは非常に難しいが、今回、事業者の方たちと行政と一緒に考えたビジョンなので、そのような事業も進められるといい。新潟の燕三条では産官学連携で商品化に取り組んだ例もある。」
- 委員：「儲かっているが廃業する事業者もいるという話を市長がされた。重点プロジェクト5の中に『創業・起業しやすい環境整備』というのがあるが、ゼロからスタートするより、儲かっているところ引き継ぐことも進めるといい。そのための情報提供が皆無である。後継ぎがないために、あと数年で廃業するところが多くある。行政、商工会議所、観光協会などがヒアリングに行き、情報を拾い上げる。これからはオーナーと経営者を分けて、今あるお菓子屋さんなどを残すことを考える。その情報を全国に発信して来てもらう。そのような取り組みが地消地産にもつながると考える。地消地産は、経済を中で回すということなのでマインドが重要である。商工会議所や観光協会では最初の乾杯は地酒を使うなどの取り組みをしていくうちにマインドが変わってくる。観光ということでは、恵那市は中山道46番目の宿だが、整備が行き届いていない。中津川は整備されていて『歩いてみたい』と思わせる。上手く整備すれば情緒豊かな場所になる。彦根も城下町だが、かつては整備されていなかったが、整備後は観光客でにぎわっている。中山道の資源を統括的に考え直す必要がある。観光でお金を落としてもらうには、良質なお客さんに来てもらう必要がある。そのためには5スターホテルなどの誘致が必要。」
- 森岡会長：「事業継承のジレンマといい、中小企業がもっとも悩んでいるテーマが挙がりました。子どもにも従業員にも継げないため事業を辞め

ていく。特にファミリービジネスで重要な課題となっている。ファミリービジネスの枠を超えて所有権を移すためにはどのようにしたらいいのか。恵那くらしビジネスサポートセンターなどでも検討していくことになるかと考える。

また外部の人間として恵那市の観光を見ると、資源が豊富にあり、岩村城へ行ったときも驚いた。恵那市の封筒には佐藤一斎の三学の戒が記載されている。素晴らしい資源をもっと発信する必要がある。今までは山城よりも本当の城の方が人気があったが、今の中高年世代には山城が非常に人気となっている。あれだけ良い状態で残っているのにみんな知っているのかと残念に思うので、発信の部分をもっと考えていただきたい。

資源のシステム化も重要。バラバラではなく一つにして資源をシステム化することも重要。ビジョン素案の中にもありましたが、農産物だけでなく観光もストーリーの中に位置づけて有機的に結びつけていくことが必要であると感じた。」

○委員：「検討部会での課題にもあるが、大型店舗の進出などによって、小規模な商店では消費者の選択肢が少ない状況となっている。平成33年には土岐市にイオンモールができる。その前には恵那警察署周辺の区画整理が完成する。そのような状況の中で地元の商業者がどう生き残るか。今回のビジョンに商品券事業があるが、恵那市では400軒ほどの事業所が参加することになる。400軒の中には小売店などあらゆる商業者が含まれており、この大きな枠組みの中でいかに自分たちの地域を自分たちで守って行くか。経済産業省の支援事業で商店街集客力向上支援事業というものがあり、関市では健康増進・経済振興・投票率向上施策と連携した商店街の売り上げ伸長のためのIC型ポイントカード導入事業を実施している。行政が支援することによって市民にオリジナルの枠組みに参加してもらう。ポイントなどを付けて、日常生活では市民に地域内の商店を使ってもらう仕組みをつくるような取り組みも考えていけるといい。商業者の自助努力も必要だが限界があるため、商店街連合会や商工会議所、商工会などが支援していける仕組みを研究していただきたい。」

○森岡会長：「産学官民連携が重要。民には個別の民と組織化された民がある。それらを上手く連携させて地域の独自性をつくっていく。事業者同士が連携していくことで全体のレベルアップを図る。全国の商店街は歯抜け状態になっており、高齢者の買い物難民問題もあるので、それを解決する取り組みも重要。今後、部会でどのように仕組みをつくっていくかを検討していただきたい。」

○委員：「農業分野は検討部会とは別に『もうかる農業プロジェクト検討委員会』を組織で検討してきた。農業でいかに儲けるか、魅力ある産業であるかをしっかりしないと担い手確保も難しい。儲かるためにはコストダウンや売価アップが必要。これまでの流通経路はJAを中心として上手くいって来たが、儲けるということ考えたときに、新たな流通経路

が必要だろうと考える。林業でも原木で出したら儲けにならないという話があったが、商品価値のあるものにしていくことが必要で、これは6次産業化につながる。ただし、生産技術も向上させないと6次産業化が中途半端なものになってしまう。良いものを作って地域の中でどう売っていくかとなると、商業や観光業の力を借りながら、地産地消の仕組みづくりを進めなければいけない。そこで検討委員会では、ファーマーズマーケットやポータルサイトを構築できないかと議論している。道の駅おばあちゃん市・山岡の集客が上手く出来ている。観光を含めて農産物の販売が上手くいっている成功例ではないかと注目している。商業・観光を絡めたファーマーズマーケット、観光資源としての情報発信を検討している。

先ほど、体験プログラムの話がありましたが、農業も観光と関わって農泊や農業体験、伝統食材の製造体験を活用して農家の所得向上に結びつけることを検討している。

ただし、農業経営としては全部買い取りなどの流通経路も残しながら、いかに地元で消費してもらうか、遊休農地を活用して高齢者に生産して稼いでもらうこともできないかと議論している。」

- 森岡会長：「地元のお酒は美味しい。これを広めて行く。さらに独自の付加価値の付いたものとして、地元の素材をレシピを変えて作って、お酒とセットで売る。今は、素材をどう使って、どんなメニューにしたら美味しいかを提供しないと売れない。さらには付加価値の付いたものから利益を残すための流通の仕組みをどうつくるかの議論は残っている。」
- 委員：「農業では具体的な課題や方向性が示されている。林業も的が絞りやすいこともありアクションプランでも具体的に示されている。しかし、商業・観光と工業は項目がたくさんあるが具体的でない。計画では、平成32年度にビジョンを見直しとなっているが、アクションプランが具体的でないから見直しもできない。もう少し深める必要がある。」
- 事務局：「商業・観光、工業については多様な業種の委員の方に参加いただき、自分の会社として考えたらいいのか全体で考えたらいいのか分からないまま検討を重ねたため、深い議論に至りませんでした。そのため、平成30年度に実施するパイロット事業の中で議論を深めていき、産業間連携事業や新商品開発、または市の補助メニューなどを考えていきたい。」
- 委員：「ビジョンに掲載しているものを全て実施できるとは思わない。これに取り組まないと課題解決できないというものに優先順位を付けて、突破口にするくらいの考えでないといけない。」
- 委員：「先ほど、事業承継の話をしました。これをやるには結婚相談所のような仲介プラットフォームが必要。」
- 委員：「今、子どもたちが激減している。それが最終的には担い手の確保に関わってくる。いかに人に来てもらうか。いかに出会いで結婚して定住してもらうかも併せて考えられるといい。」

- 委員：「先日、テレビで群馬県のグランピング（高級キャンプ）について紹介していた。恵那の土地柄、考えるといい。」
- 委員：「東京に高級ホテルがたくさん出来ているが、外国人観光客の約 8 割は旅館に興味を持っている。しかし、旅館の情報発信がほとんどなく、客室稼働率は 30%程度しかない。外国人のニーズに合わせた対応の仕方も考えていいのでは。」
- 森岡会長：「団塊の世代はお金を持っている。若い世代は数で勝負する。インバウンドの人たちは日本の伝統文化に興味を持っている。それぞれのマーケットで切り口が違うので、どうシステム化してストーリーをつくり提供するか。地域活性化は、そこに住む人が増えることと考える。今日の議論を生かして、今後さらに発展させていきたい。最後に今後のスケジュールについて説明をお願いします。」
- 事務局：「本日、委員の皆さまからいただいた意見をまとめ、検討部会で再度ビジョン素案について調整します。再調整した内容を次回の振興会議で報告し、3 月にビジョン策定とする予定ですので、よろしく願います。」

#### 4. 閉会

- 森岡会長：「では、今回の会議はこれで閉会とします。」